

古神道の基本的性格

徳重浅吉

上代日本人は彼等の考へた實在物と實在者、即ち自然と人間との最初の形を名けてものと言つた。隨つて物の中には物質的要素と精神的要素と、それ等をして生あらしむるもの、活動せしむるものの本源としての或種の力をも持つてゐるのであつた。(因にこゝに生あらしむるものといつたが、それは上代人にとつては存在するすべつたものは生きてゐるのであり、草木もことごとく物を言ひ、巖根、樹立ち、草の片葉までも騒ぎ立つたり靜まつたりすると考へられてあつたからである。)そしてこの物から神が化り生でられたのであつて、その化爲といふ作用は物に自ら具する根力の發現であるが、この力をも特別に抽出して産靈と言つた。然しかく既に靈といふものを認めることは、物それ自體が生きてゐるといふ考へ方よりも一歩進んで、物の中にはそれをして生かしめてゐる或る種の力があるといふ考へ方をなすに至つてゐるのであつて、此の點でアニマチズムとアニミズムとは殆ど同時併存の思想段階であつたと見てよいであらう。

それはとにかく神が元來物と直接に連結してゐることは、やがてその中には種々雑多な神があられるといふこととなるのであつて、かの本居宣長が古事記傳に解説した有名な一條、

さて凡て迦微とは古へ御典等に見えたる天地の諸の神たちを始めて、其を祀れる社に坐す御靈をも申し、又人はさらにも云はず、鳥獸本草のたぐひ、海山など、其餘何にまれ、常ならずぐれたる徳のありて、可長き物

を迎徴と云なり。

といふ詞は、それが古典の徹底的な研究の上に出た論断であるによつて、忠實に取り入れられてよいのである。自然「人が神であることは勿論、人ならぬ物には、雷は鳴神、神鳴りなど云ひ、龍、樹靈ツクリ、狐などのたぐひもすぐれてあやしきものであるから神である。又虎をも狼をも可畏き神と云へること日本書紀、萬葉集などに見え、桃子モモに意富加牟都美命といふ名を賜ひ、御頸玉を御倉ミクラ枚擧メウケ神と申されしことあり、磐根、木株、艸葉のよく物言ひしたぐひも皆神である。海山などを神といふことも多い。それは其の御靈の神を云ふにはあらずして、直ヂキにその海山をさして云へり」(前引古事記傳文句を註してある文の大意)といふ状態であつたのである。

これで考へられることは、凡そ上代人の思想に於ては、存在するものすべては、全く精神的のものに受取られてゐたのであつて、後代人の如く物質と精神との區別はなかつたのである。即ち所謂物といふものも物質的な存在ではない。そしてかういふ物から神が化り出づる。その神は世の常ならず、すぐれたる徳トク即ち神力の現はれがあつて恐ろしきものであり、而もそのすぐれたりといふ意味は、同じく本居翁が説けるやうに、尊きこと、善きこと、功しきことなどのみを云ふにあらずして、悪しきもの、奇オキしきものなども含めて云ふのである。然らばこゝに云ふ化り出づるといふ意味は一段高尙な、或はすぐれた存在に變るといふことであると解してよいであらう。即ち神は物と同質のものである。後代人の言葉の使ひ方から云へば、所謂物も人も神も同質のものであり、神はたゞ一段高い存在、世の常ならずすぐれたかしこきものであるといふことになるのである。

元來人間は思考する動物である。だから彼等は、その經驗するすべてを解折し推理し判断して納得せんとつとめさゝれて來たのであるが、それについては先づ彼等自身が現に生活し存在してゐることについて、その中心となつてゐるものゝ存在を認知したのであつて、それを心と云つた。コは濃い、細やかなどのコと同じく、凝集の意をいふ。そしてその心が外に出るのを聲といひ、その聲が心の内容を示してゐる意味をとらへて言、更にまた心が動作に現はれた結果を認めて之を事と稱した。だから言も事も人間に關することばになつて、物が外界自然物に關するのと分たれてあつたのである。

假に心の存在を認めてゐるものには、その心の動き或ははたらきにも、その現はれである言葉にも事業コトワザにも、自ら一定の條理があることに氣付かざるを得ぬのであつて、それをことばりと云つた。ことばりは理、義、道、言理、事理、道理などの漢字をあてゝあるが、その原義は眞偽正邪などいふ價値的内容が別れる筋目のことであつたのであらう。言ふまでもなく人間の尊き理性の顯現をさして云ふのであつて、この言葉が日本書紀にも先づ初めの方に出てゐる點に強き意義を感じしめらる。

かく古代人は彼等自らの生活、生命への反省によつて、そこに中心をなすこゝろがあり、その心の活動、發言たることには自らことばりが貫通してゐることを知つた。だがかゝる省察は、同時に外界たる物の世界にも働く

のであつて、その點では彼等は最も強く、廣される大空(これをアマと云つた)にピカ／＼輝く日輪を見た。ヒカリ(光)もヒ(日)もそれから呼ばれた名稱なりと云はれる。そして同時にそれが明るさと温かさとの源であり、雨(天水といふ義なりといはる)もそこから降つて、兩者相合して草木を芽ぐましむる不思議な力のものであるらしい事實に注意してゐるのである。而もそれは彼等が實際生活に於て經驗する火と、(出水)との功能、はたらき如何にも似てゐる事實である。のみならずその水でさへも火の力では氣化上昇してなくなる。そこで日輪を外界の中心とし、それを地上なる火と同質なものと受け取り、かくてヒといふ言葉によつて物の世界の中心生命を考へ、同時に人間にも之を及して心の主體、生命の本根といふやうなものを呼ぶ名とした。だがその場合なほ宇宙には風があり、生きたものには呼吸といふことが最も直接に嚴存してゐる。そこで生命の働くほんもとの素材といふやうな意味でキといふものを考へた。だから氣が働いて居れば生きてゐるのであり、キが好ければ清し、ヒの働が十分であればよく輝いて明るいを受取つてゐるのである。

人にも物にもヒがあり、それがキによつて生きてゐるとして、その働きには一定の筋目があるといふ道理の觀念の發生は、必ずや自然界に於ける週期的な諸現象、人間の社會的生活より來れる種々の必須的規制事項等より自ら興らざるを得なかつたのであらうが、然しながらさういふ自然的推移運行或は當爲的意義による豫見の類に對して、彼等の周圍には餘りにその懐くことわりの觀念を以てしては領解の行きかねる事象が多かつたことであらう。例へば日にしてもその強力の光りと熱とは何によつて然るか、生活に利用する場合の火のありがたさは、

晝と夜とが交互するやうに、單に不思議な事であると感じても、一步突きこんで考へれば、かくの如き原因不明の事はいたく不安の感を與へることに違ひないのである。沉んや一旦制禦を失つたときの火の強力な勢ひ、害毒、さういふことは殆んどあらゆる物にも事にも具有せられてあるのである。さうしてみれば、一度靜かに人間がその知的省察を試みた場合には、彼等の周圍は、いな彼等自身さへもが解し難き不思議なるものゝむらがりであり、恐ろしき威力を持つものゝ集積であつたらうと思はれる。古代人の生活が全面的に宗教的であつたのは、かういふ點から自然であつたとしなければならぬ。

三

古代の素朴な宗教思想が、外界の靈ソウルしきもの神ゴッドしきものに對する驚異に發し恐怖に深まつてゐること、並びにそれよりしてかゝる恐るべき力を制禦し鎮和する爲にいろ／＼の呪術が案出行使されてゐたこと、又それ等の荒ぶる神、悪しき神に對して、人間を保護する神、正しき神もあつたことはこゝに云ふまでもあるまい。そして總じてそれ等の物にせよ、神にせよ、その保有する靈しき力、神しき力、恐カウき力、そんなものを稱することはたであつた。雷は嚴しきチ、大蛇は大きなチ、ノヅチ、ミヅチ、此のたぐひであり、千速振神、速風ハヤカゼ、命、力、血、誓、契など、とにかくといふ言葉は靈感あるものまたはことに關係ある言葉であり、それがもつと進んだときにはイツといふ發音に轉化した。尤も此のイには忌み淨められたといふ意味があるがツはチの轉音であること疑

ひはない。だから稜威といふ字が當られてあるのであり、而してかゝる靈しき威力に對しては恐れ戰くのあまり、體を締め身を卑くするのであつて、これを畏るといふ。即ち可畏きといふ言葉の意味もわかるのであつて、それを重ねて莊重にしたのが掛けまくも畏きといふ表現である。

奇しきこと、あやしきことがその因素であるから、かういふ靈感も物にもある。即ち物が神の如きものたる所であつて、神代紀に邪鬼アシキモと讀ませてある如く、たゞ低級なもの、疎スぶるもの、悪鬼、邪神などゝいふ風に考へられるやうになつたのは、蓋し人文の發展に伴ふ神觀の分化にもとづくに過ぎない。「物の怪」などもかくして了解されるのであり、物部氏が祭祀、呪術にたづさはつてゐたことも然るべき事と受取られるのである。延喜式龍田風神祭の祝詞に「物知り人」といふ詞があるが、これも物部と似た職能を持つてゐた人と思つてよいであらう。

而して物を敬畏するといふところでは、まだ個々の物體を一まとめにして、靈異なるものと見る考へ方が強いのであらうが、それがもつと思察を加へられると、どうしても各個の物の中にその靈能の中心、凝集した存在といふやうなものを考へるのが常であつて、それが魂マシヒといふものの信仰でありアニミズムと呼ばれるところであらう。タマシヒと云ふ言葉はヒが玉の如く靈美貴重なるものであるとする意味を持つてゐるのであらうが、それは在る事は信ぜられても、現實に形あるものとして掴むことは出來ぬ性質のものである。然し現實の經驗の上では、その靈異なるはたらきが何時も人間にせまつて來る。さういふ眼には見えぬが不思議な力、害毒や恩恵としてせまつて來るものをカミと云つたのである。神の語義を渡邊重石丸は隱身即ち目に見えぬ實體の謂なりとし、堀秀

成は隱靈なりとしたが、まことに、古音の力は幽、霞、香、風、陰、隠れる等に例證せらるゝが如く、目に見えぬ存在を示す意味を持ち、ミはヒと轉じ合ふことへミが蛇となり、穀物を擲る道具を箕といふ類にても察せられ、大山祇、海津見といふ神名のミもヒであつたらしいのであるから、カミはカヒ即ち目に見えぬ靈實を謂ふ言葉なのである。尤も神の原義に關しては赫身、明見、鑑身、屈身など十數説があるが、自分は何れも採らぬ。近時最もよく教へられる上の義なりといふのも古事記に神を迦微、上を賀美、萬葉集に神を可尾、可未、賀美、上を賀美、可美などゝ記しあることによつて奈良時代以前にはその發音が別であつたことが思はれる今日、問題とするに足らぬ。所詮神の原義は目に見えぬ靈で、その働きが奇靈に、また尋常ならず、従つてその成果的顯現即ち、ことも宏大強烈でいやちこく人に響いたから、その投ぐる恩恵も害悪もひどく、こんな場合には害悪の方が強く感ぜらるゝので、之には恐れおのゝき縮屈んで禮まう外なかつたのである。神が物より一段高次な靈能あらたかな存在であることはこれでよく領解せられるであらう。

四

神をかくの如きものとする、人間はいかに考へられたか。見やうによつては人こそ最も靈妙不可思議なものである。だが古代社會にあつては、思索よりも經驗が強く智解の内容を性格つけてゆくのである。自然彼等に珍らしからぬありふれた存在では、ヒト即ち靈性を宿し止めてゐるものではあつても、神ではないのである。然し

その人間の中で取り分けすぐれた能力、それは肉體的なものでも、精神的なものでも、とにかく非凡な威力、それによつて人間に畏怖の感情を起させるものを持つてゐる特異な存在は、すべて神と考へられたのである。だから人が神であるのでなくて、神が人に於て懸れ給ふのであり、如何に上ツ代と云つてもすべての人が神であつたわけでは決してない。これヒトと云ふ言葉が神代紀にも澤山出で且つ之に人の字をあてあれども、なを、人、神人、神聖等の文字をもカミと訓じてゐる所以である。畏きことながら天皇も現人神であらせられ、「現御神と大八洲國知ろしめす」のである。こゝのとの字は、として、の如く、となりてなどいふこゝろを表はす詞であらう。聖武天皇が東海道東山道に節度使を遣はされるときは御製に、「食す國の遠のみかどに汝等が、かくまかりなば平らけく、吾はいまさむ天日王朕、うづの御手もちかきなでぞねぎ給ふうちまでぞねぎ給ふ」といふのがあるが、かく御自身を天日王朕と仰せられ、いまさむ、御手もち、ねぎ給ふなど、敬稱を用ひさせられるのは、さういふ御意識があらせられての御事と察し奉ることが出来る。

而もそれを神代と呼んでゐるのは何故か。元來人間が學問的な省察によつて過去の經驗と記憶とを整理するやうになつたのは、人間生存の長い年時に於て極めて短い近き世からであり、精神的に云へばもつと甚しく、殆ど悠久に對する一瞬であらう。その長き年時、それは滅亡と忘却が恒に繰返される人間の世界に於て、果して幾程のものが印象せられて來たことであらうか。而もその纒かに残りし印象さへ、選擇と傳承と種々の淘汰作用をうけて、いく度變改されたことであらう。殊に人間には、如何にもして彼等が現に生活し存止してゐる世界に於て、

持ち居る知見を標準として、すべての事を合點し得られるやうに解釋せざれば措かぬといふ根本的要求がある。まことに古希臘の哲人が云つたやうに人は萬物の尺度であるが、その人間の物指では割り切れぬこゝだくの事象が簇り居り、而も此等の間に處して、すべてを神支配の下に、その意思をうかがひ知る人の導きによつてのみ生活して來たことの明かなる時代は、之を神代と呼ぶのが最も適當であつたのである。それ故に神代といふのは後代、もつとはつきり云へば記紀神話の集成記録せらるゝ頃の人が考へたその前々、大昔の世のさまであつて、その神代と考へられた時代に生活してゐた人々はやはり人の世と考へてゐたのに違ないとしなければならぬ。

人と物と神とをかく同じ生命のつながりに於て見ることは、即ちまた神々がすべて人格的のかたちを以て人間と直接につゞいてゐる觀念の存在を示すのである。民俗學者の言ふトーテムズムはかういふ地盤にも根を持つてゐるのであらうが、そのトーテムズムの痕跡は我が古代史の上にも認めらるべきこと、已に諸先輩の指摘せる如くである。例へば神武天皇紀に見はれてゐる八咫鳥の一例をとつても、それが描寫されてゐるかたちは、現代人の常識を以てしては、決して正面からは理解出來ぬものである。靈異記に見ゆる美濃の狐氏の説話なども同じ類であらう。ベチェラー博士の報告によれば、アイヌ人は今に至るまで狐、狼、鷹、熊、梟等のトーテムを信じて居り、重き祭儀や饗宴に用ふる冠には、それを木彫にしたるものを前額部につけるといふが、それは直ちに熊野速玉神社の八咫鳥祭に於ける烏頭帽を聯想せしむるとしても無理なことではないのである。

元來トーテムは部族的に持たるゝ動物祖先の信仰であるが、而もそれには當該動物の具有するが如き靈能を與

へられて幸福を得られることの呪的崇拜が伴ふてゐるのである。そして之が發展轉回して個人的のものとなればマニツウと云はれてゐる保護精靈の信仰となつて未開人殊にアメリカインディアンの間に行はれてゐることもすでに普く知られてゐることである。そしてかういふ信仰はその内容上の特性として願意を持つ者が嚴密なる禁忌、齋戒、斷食等の生活に入り、強烈なる祈禱、呪願等の所作の裡に夢幻の境に入つて精靈の交感を得、依つて以て超自然的な力を惠まるゝとするのであるが、かゝる古代的原始的なる信仰形態が、我が古典に記載せられてある神祭の部面にも甚だ類似したる形を以て現はれてゐることは、これまた何人も承認してゐるところである。

五

尤も我が古典は、その集積すでに文化の甚だ進める時代のものであつて、これ等原始信仰に類同する記載があるとしても、それは著しく變移したものであり、むしろそれ等原始信仰消滅後に殘存せる形態を示すに過ぎないものとして見るべきであらうが、然しそれにしても特異なる靈威を畏信し、祈願、夢想、卜占、祭祀等によつて神の御こゝろを知り、その恩賚を受けらるゝと信じてゐたことに於ては、どうしても強く相通するものあるを認めざるを得ぬであらう。かくて古典に見ゆる祈禱^{イノリ}で、祈誓^{ウカヒ}で、祈ぎ^{イノリ}で、卜占^{ウラハ}でなどいふことは、これら神の御こゝろをうかがひ知る方法過程を示すのであつたが、さういふところには、神はすでに害惡を與へ、威壓を加ふるデモンの性質は消えるか薄くなつて、幸福を與へ繁榮を齎らすといふ保護神的要素が強く支配してゐられる

のである。勿論此の場合とても、神々の中には強暴なる靈威を帯びられるがあり、また物にはデモンの存在が多くて、それ等が人間を害ふとせられるものも多いのであつて、それ等が神の威力の主要なる要素であるから一つには神々には眞心をこめ誠敬をつくして、その御たけぐしき心を和めることもあり、またより強き靈威ある神にすがりて、より低き力の暴ぶる神や、物たるデモン類のはたらきを鎮めることもある。古典に鎮といふ字をシヅメルともハラフとも訓ませてあるのはかゝる理由からであつてシヅメルは物のはたらき、それも好ましからざる方面の活動力を壓え靜めることであり、ハラフはその好ましからざるはたらきのもとである邪氣を拂ひのけることなのであつて、殆ど同じたぐひの結果を目的としてゐるのである。と言へば、ねぐものものむのも同様であつて、之は全く願望希求の態度を以てする神智神力の領得を目的とするに外ならない。そして此等の何れもが神々の靈力、靈智を目的としてゐることは、そこに自ら特別の行法所作を必要とせしむることを約束するのであつて、それでこそ、神々に仕へる特別の人、神々を招き、その意思を承はる特殊の人、或はそれについてのいろいろな行法が存在し、神事が特別な技術を伴つて一般の民衆よりも一段すぐれた高き人々によつてのみ行はるゝものとなつてゐるのである。そして今日でも神事に奉仕する聖職の名を禰宜、祝巫といひ、昔は此の外に忌部、卜部、遊部などがあつたのであるが、如何にもその語義だけでもおこりを説明してゐるやうである。

ねといふ言葉が神事に關係したものであることは既に説かるゝところであるが、琉球にて神人を根人といふ如きは最もよくそれを傳へてゐるのである。そしてねぎがねがふなど、同根の語であつて、つまり禰宜も神に願

たのむ、願意を取次ぐ聖職を意味する言葉であることは言ふまでもない。祈むといふ語も祈、請、願祈、頼祈、叩頭、稽首等の字があてゝあつて、深禮涕泣して深厚なる敬意をあらはすことを言ふのであるが、その裏には強き願意が示されてある。その願望をあらはすには、又別に誓盟といふこともなされた。熱心なる祈誠をさゝぐることによつて神の御心をいたゞく、それは主に夢想によるとするものであつたらしい。自然この熱心なる祈誠は己れを深く忌み淨めて、精神の清淨、靜整、深化を必要とするものであり、そのためには持戒清淨の生活をする事が重大な條件であつた。つまり人がその外面的、又は人間的生活による精神の興奮、動搖、溷濁、紛亂などを拂拭、鎮靜、除去、統一して澄清純一な状態にかへせば、そこに神の御聲を聞き得る資質があらはれ、神智を惠まるゝとするのであつて、その神智の中には絶大な力と威嚴とが含まれてゐると思はれてあつたのである。うけひといふのはヒを受けとる、いたゞくといふこゝろで、かういふ内容を具したことがばだと考へられる。

六

然らばかうして神々から授けらるゝもの、即ち謂ふ所の神々の御こゝろは何であつたか。さういふ疑問を持ち出して來ると、我々は書紀に於て最初に提示される哲學的道德的名辭として理といふ字と道といふ字に注意せざるを得ぬのである。然しこの道は乾道とか乾坤の道とかあつて男性女性の本性殊能といふやうな具體的な意味に使はれてあり、でなければ道理、道といふ字ではコトハリと訓ましてあるからこれはむしろ理の具體的顯現を云

ふと解してよく、従つて問題は理のみとなるのである。而してこの理といふ詞は、「陽神悦びたまはずして曰く、吾は是れ男子なり、理まさに先づ唱ふべきを如何にぞ婦人の反りて言先づる、事既に祥なし、宜以て改め旋るべし」とあつて、言と事と理とが一聯の關係を以て區別して記されてある。そして記によると此時水蛭子を生みましたので、「良はず」とのたまふて、共に參上りて天神の命を請はれ天神は命以ちて布斗麻爾に卜相て詔られたのである。而も亦此の命といふ字は、同じところに伊邪那岐命伊邪那美命二神の御名として神といふ字と同様に用ひてある。即ち二神の成りましたときは神の字を用ひてあるが、それが天神諸の命以ちて地上に降られたときは命、ついで大八嶋を始め風海山川草木火金等諸神を生みまして神遊りませば神、特に黄泉國以後は大神となつてゐられる。天照大神は常に大御神と記し奉つてあるが、須佐之男命は數々のたび、命でたゞ根國に至りまして後は大神としてある。して見れば神と申せば至つて崇き、靈威ある、且つ神祕なる人間以上の御存在に名け奉りたる字であるやうであり、命といふのはその神を地上的人間的に看取し奉つたときの御呼び名であるやうである。だから、實に此の點に我々は、神といふものゝ原質的な存在が人間との間に血縁的な關係を以て親まれて來た經路をまさしくアウフファツスし得るのであつて、かのトーテミズムはかういふところにこそ進んだ形を以て我々の神話に餘波を残してゐるものと謂つてよいであらう。

まことに、此の點に我々は、我が古代信仰特にそれは新撰姓氏錄によつて詳密に示さるゝ國民的特色ともいふべき民族觀念の一つの尊さを見るのである。乃ち古代人の神々はすでに前述の如き性質のものであらせられる。而

もその神々には通じて自然神、人文神(英雄神)の區別あること誰しも承認する所である。尤も普通には造化神をも置いて考へるのであるが、予は嚴密なる意味に於て我が古神話には造化神はないとするものであり(此の點維新研究第二十章大教宣布運動と天神造化説參照)、松村武雄博士の如き三分説をとらぬ。而して自然神といふのは自然界の物、又は現象等を神々として尊崇するもので、古代人に畏敬せられたことが奉祀の主原因となつたものと考へられるのである。例へば石土昆古神イハツチヒコ、金山昆古神、波爾夜須比古神と申して見よ。それが何れも土地に關係ある物を神格化し奉つた神々と考へられるであらう。沫那藝神、沫那美神といへば水の逆流するところを思ひ、高淤加美神、鬮淤加美神といへば天上高く濃雲にかくれて鳴りひびくと共に驟雨を降り下らせる不可思議なるものを運想せしむる。大直昆神、八十福津日神などかくして理解せられぬにや。沉んや屋船久々運命は木の靈なり、屋船豐宇氣姫命は稻の靈なりと月次祭の祝詞にも明記してある。又更に天常立神、國常立神などより、所謂造化神たる天御中主神、高御産巢日神、神産巢日神たちまでかくして仰ぎ奉りて聊かも不都合はないであらう。だからかういふ大事な神々でも獨神ヒトリカミなりまして御身ミミを隠したまひきと説明し奉つてあるのである。然らばかゝる神々に子孫のましまさぬべきは自ら其のところ、松村氏も、通常子孫なけれど人間の幸福と禍難とを司る神にして、その故に祭らるるを以て一に祭祀神とも名くとしてゐられる通りである。而も姓氏録によりてみれば、是等の神々の子孫と稱する氏族の如何に多きことか。中臣氏ナカノミが天神族の中幹として四十二氏を數ふる多數に繁榮したのは云ふまでもないが、そは津速魂命ツヤスミタマに出づとしてある。大伴氏も十五氏で高皇産靈神の子孫、その高皇産靈命の子孫といふのは外に日奉氏、久米氏、

齋部氏、玉作氏等十八氏族があり、神皇產靈神の子孫と稱するは最も多くて六十五氏、その他角擬命天壁立命、天底立命天御中主命の子孫など稱する氏でも二十五ある由である（太田亮氏新撰姓氏錄と上代氏族史による）。而してかゝる祖先神の信仰は單なる形式的裝飾にあらずして、實に我々の祖先の生きたる信仰であつたのである。然らばこれを如何に解すべきか。予はそこには既にトーテミズムなど云ふべき、アニミズム、アニマチズム、フェチシズムなど、同じ文化階段に於て流通し居りし人間思想の形態よりも、遙かに進みし文化世界に於ける祖先信仰の形式として肉身的系統の外に、或は外にといふよりもそれをもつと高めて、精神的要素に於て認めたるところの靈統觀念とも謂ふべきものゝ嚴存を認めんとするものである。

七

神々の第二類は人間神とも謂ふべく、人文的に活動せられる語り傳えの神々であり、此點まづ自然神が殆ど名のみ傳えられあるのと異なるのである。即ち此類の神は曾て人間として地上に存在しませる方々であつて、その性格の裡に何より勝れたる特異のものを有りましたのである。其點から色々の人間的活動をなされるのみならず、必ず連綿たる子孫を有し、特に自らも亦神々を祀つて御座したのである。それ等くさんぐの性格から、或は英雄神とよばれ、或は祖先神と見られる時もある。とにかく曾ては現實の人間たりし方の人格なり事業なりが世のなみならぬものであつたが故に神靈として崇められたのであり、神話傳説はその事功の投影だと思はれるのである。

こゝに事功といふ字を使つたが、日本書紀には、功と書いてコトと訓んでゐる。神功もカムコトと訓んでゐるのであつて、事柄一般の中でも人生に利益ありとする特別のものをコトと言ふ次第を示すのであるが、之は「事の語りことも」とか「事問ふ」とか或は「事しあらば」といふ用例でも推察出来るやうに、元來こゝといふ言葉は必ずや何か常ならぬ、重き威壓を持つことのみを指して言つたものらしいのである。即ちかのものと言ふ言葉が物の怪、物知り人、物部などいふ用例によつて或る神靈的の奇しき力を有するものをさして言つたとほゞ同様の性格を持つ言葉なのである。而して此のコトといふ音が言と事と二つに通ずるのは、原初に於ては言と事との間に區別なかりしことを思はせるのであり、ことわりも言理とも書き事理とも書けるところがある。まことの如きは我が古代道徳思想の最初に出て来る基本的な意識であり、古神道の中核をなすのであるが、それは最も強く心の誠實を言ふのであるけれども、同時にそれが事の眞實に合致してゐるといふ基礎的信仰がひかえてゐる。そしてこれ等のまことは正しき言葉によつて表現せられる。垂仁天皇紀に不言と書いてマコトトハズ、天智天皇紀に不能語をマコトトフアタハズと訓ませてあるを見ても言はまことを言ふが本體であり、自然かゝる言辭には不思議な靈力が具せられてあるべきであつて、言靈信仰といふのもかういふところに基礎があるのである。

さうすると言は人間の意思が音聲にならされるもの、事はそれが事件として生起するのを言ふのであつても、古代人にとつては、すべて彼等の思量をこえた神の世界のことであつたであらう。そしてその神のみこゝろ、眞實を聞くためにいろいろの方法が案出されてあつた。太占もさうであるが、神懸りの巫女によるのもそれであり、

この二つが最も多く依用せられた。而も何れの場合でも神のみこころは命以ちて告られるのである。然らば此のみことなるものゝ尊貴なることは言ふまでもなきことで、そこで此の言辭コトの本源たる神、之を宣る人、それ等の靈威測りがたきところに畏敬の情を含む呼び名として命ミコトといふ語を用ひ、後に之にあてるに命といふ字を以てしたのであらう。かくて語言ゴゴンに於て其人或は主格たる存在を表はし、之によつて尊敬の意を寓する。かういふ事情から尊といふ字をあて用ひざれば落着きがない語感があるやうになつてゐた。而もその尊と命との二字の間には嚴密なる區別が存し、尊は至貴をあらはし命は人間に近き意味がある。さういふところから推究の歩を進めると、古代人の意識世界では、ミコトと呼び得る神靈界の性格、言ひ換へれば神々コトを言に於いて把握するといふ一線に於て、人間神と自然神とは結合し、同質のものと思へられる世界が開けてゐた。一例を以て言ふならば、出雲國須佐といふ地方に現實に一個の人間があつて、その萬人にすぐれた武力と智力と仁愛の精神とをもつて、猛獸毒蛇の害を除き、異民族の來寇を退け、植林、治水、耕耘、栽培等の産業を教へて、以て民生の生活を厚うし歸嚮を受けたとする。斯くの如き人傑を時人が恐れあがめて之を呼ぶにも須佐之男命といふやうな言葉を用ひたといふことは、古代に於てさも自然であつたらう。だがそれが星霜を閲みして、此の英雄又は仁人の性格事業が語りつがれ説き傳へられる間には、いろいろな修飾が加つて、所謂神話的表現を以てせられるゝに至ることも亦想像し易いことである。かくて此の英雄たり農耕治水の先覺たりし地方的君主は八岐大蛇を斬り山川を震動させる。日輪の光さへも遮るかと思へば、伊邪那岐伊邪那美二神の御子神として、天照大御神と誓盟カケヒをして御子神を生ま

れる。また一面には出雲にて大年神や宇迦之御魂神を生みその孫には大土神御年神などがある。更に黄泉國に行つては頭にさへ吳公ニカゲの多き恐ろしき存在として、人間をはなれた靈威の權化たる表現をせられることになる。略言すれば、英雄神、祖先神、農業神等の内容をもつて傳えられた人間神たりし須佐之男命が、暴風神、造化神、幽冥神などいふ内容まで持たるゝことになる。そしてかうした場合に命から尊となり神となり、大神となられる。といふよりもかういふ變つた表現をしなければ、その内容を示しがたきいろ／＼な性格を持ちますに至るのである。これは普通に考へられる表現を以てすれば人文神の發展と云ひ得るであらう。然しながら神祇觀念の探究者にとつては、自然神が人文神に結合せられる仕方、もつと遡つて云へば目に見えぬ不思議な存在といふ意味を持つ神なるものが、現實の人間の形をとつて血縁のつながりまでも持つまでに人間に近づいて來られる道筋なのである。そして此の道筋は、こと即ち言と事とは一つであり、それはことわりといふものに規制せらるべきものである。でなければさがなきもの、ふさはぬものであるといふ理念に沿ふてゐる。まことに我が古神道は理性的なものであり、道理と誠とを中心生命としてゐるものなることを、よく領すべきである。同時にまた長上の尊敬、祖先の崇拜の如き人倫的なものが天地神明といふ宇宙的なものまで擴げ高められる融媒がこゝにあるのである。何と言つても古神道の性格を見きはめる上の最も重要な契機である。

かゝる神々の當體の遷移は、同時にまたその性格及び神威の變化を伴ふのである。即ち初めは神といふ字をアヤシキと訓ませる如く、神は不可思議な、而もそれはむしろ怪奇といふ文字がよりよく當てはまるやうな意味を持つて居り、従つてその性能も恐ろしきもの、祟あるものといふやうな部面を強く感ぜられてゐたのである。之は後の人から見れば甚だ不可解なことであらうが、古事記、日本書紀、古語拾遺及び古風土記、靈異記、萬葉集などを細けばその實證は隨處に見られるのである。これ蓋し自然崇拜的要素が強いからであつて、未だ物との間に截然たる區別が考へられなかつた原始的信仰の名残であらう。松浦武四郎の蝦夷日記、山縣半藏の北陸日誌などを見ると、アイヌ人は嘉永、安政の交でも、山川至るところに靈威恐るべき神のあることを信じ、旅行するにはイナヲを手向けてその怒をさけることに汲々としてゐる有様がよく領れるが、我が上代人の思想が恰もこれと同様なものであつたことは、こゝに特に説明を加ふるまでもないであらう。

かういふ精神生活期の人々にありては、神々の存在は専らその強き力に於て感ぜられてゐたのであり、それをチといひ、恰も支那の稜威といふ字が同じ内容を有するものとして採用されたのである。古代支那人が自然現象、動植物等に甚だ敏感に神性を認め、それを靈威として受取つてゐたことは、古銅器に於けるグロテスクな紋様、漢字の象形等によつていかにも明瞭に知らされてゐるのであるが、そのはかり難き力を稜威、威稜といふ語に寫した。出典を求めれば、漢書李廣傳に威靈懾ウツカスニ平隣國ツナミとあり、それに神靈の威を稜といふと註してあり、また南史梁武帝記にも稜威直指勢シ風電ムとあるのであるが、我が大祓祝詞には之を「燒錄の敏錄もて打拂ふこと

如く」など、云つてある。稜の字はもと刀の刃のところをさすからである。そこで稜威をチの國語にあてたのであるが、そのチに發語の音がついてイツとなり、更に尊美の意を寓してミイツと訓んでゐるのである。而して威の字は支那古音は嚴密には何か知らぬが、とまれイに近いものでありしなるべく、それも亦山海經に窮山際有軒轅丘、射者不_ニ敢西向、畏_ニ黃帝之威_一也とある如く、勝れたる靈力に對する恐れとつゝしみを言つたやうである。即ち日本書紀を見ても普通稜威をミイツと讀んであるが、崇神天皇紀には勢、景行天皇紀には威、威勢の字を用ひてある。萬葉集にもおほむね勇威の字を用ひてあつて、とにかく恐れつゝしむべき勢威をいふのである。而も天真名井の段には、伊弉諾尊功_ト既_ニ至_スたまひ徳亦_ト大なりとあるのを見るとその勢威の内容はいたく進んだものである。アヤシキイキホヒと訓ませある如くであらう。而して此の恐れつゝしむことを要せらるゝ勢ひがかしこきものであり、これには威、可畏_{キコ}きなどいふ字が用ひられた。その他畏_{カシ}き、恐_{カシ}きなどの記しあるに、神功皇后紀になると貴_{カシ}きと二度記されてある。これは非常に注意すべき點で、ミイツの内容がだん／＼變つて來ると、カシコマルことを示す文字も、亦従つて變つたものが用ひられるやうになるのである。そして後には大むね賢といふ字を用ひるやうになつたが、さうすると神々の勢ひにも天孫降臨の段の如く氣_{イキ}といふ字さへ用ひた場合があるのに、徳_{イキホヒ}といふ字を使はねば落着けなくなり、神_{アヤシキイキホヒ}徳_{イキホヒ}といふ字も見えるのである。かくて今日我々がふだんに用ひる御稜威といふ言葉と文字とは、尊、貴、賢、徳、威、畏、敬、恐等の字によつて表はすべき複雑な、尊き慕はしき情感を此の一言に籠め含めて考へ奉つてゐるのである。

九

この事は我々が「掛けまくも長き皇神等の太前に」と唱へ奉るに於ても同様である。即ち神々の御靈威を仰ぐときでも、太初以來長き年月のそれ々の時代觀念に於て、それに含められてゐた人間内心の語感語想はいろいろ變遷して來たのであつて、この事を一面から見ると神々の觀念内容の變化、或はもつと端的には神格の進化と言つていゝのである。而して是亦我國人が支那の文字を依用する方法にあとかたを残すのであつて、カミが迦微、加美、神、鬼神、神聖、人、神人、者などというゝ記さるゝそれに見得るのである。その神の字も起りは日月星の光を象形したものだといふが、我國人が採用する頃には、最も以て、陰陽測られざる之を神と謂ふといふやうな意味が考へられたらしい。それもだんゝ進んで來ると神聖といふ字を用ひねば恰當しないやうな内容を持つに至つた。聖は通ぜざる所なく、神は妙にして方なきを謂ふのであるさうだが、とにかく此の字によつて表示せられるものは、知性と道德性とに於て間然するところなきまでにすぐれた、言はゞ人間的性質に於て極端に洗練せられ修蓄する所ある立派な性格であり、かのアヤシキと訓む場合などに指示せらるゝそれとは格段の相違あるものたることは云ふにも及ばぬことであらう。我々が今日用ひてゐる神といふ言葉と字とは、これに更に民族的國家的の保護神といふことより宇宙最高の存在といふやうな内容までも含みたまち給ふところの、崇高博大な存在を考へ奉つてゐるのである。

而してかういふ神の觀念の進化は、何といつても人間の文化意識の發達、その生活の展開に原因するのであつて、そこに人間理性の投影を見るときもよいと思はれる。理コトワリといふのは、その原初的意識であるが、それに應同する具體的事狀は、赤アカき心、黒クロき心、清アハ明カき心、濁キダナ(邪)き心、善ヨシき心、惡コトコしきこと、虛マコトノラ實ゴト、虛マコト實イツハリ、横アレキ惡カ之カ神カミ、惡アラフ神ルカミ、利ヨサ害アハシツ、忠マコト、忠タガシ效シキマコト、忠タガシ直シキセソ者ノ、徳メダシ、徳メダシなどいふ言葉と文字とによつて示されてある。由來我が古神話は善惡の彼岸にあり、よきもあしきも不可思議な神々の御しわざであつて、人間のはからひでよいのわるいのと批判すべきではないと主張するのが一般の態度であるのであるが、之はさう考へるよりも古神話の發生が人文的に見て極めて原始的なる爲、道德的意識も未だ發達して居らず、従つて日常の行爲を見るにも、鋭シき善惡の批判をしなかつた、さういふ民族文化の原始的未分化的様相を示すものと見るのがより當つてゐるであらう。といふのは、人はどこまでも理性的動物であつて、日本民族もその天性理性を貴ぶ。そしてその理性は先づ神に於て表示されるとしたと何處の民族とも同じである。そして此の神に於て表示される理性をウラといつた。ウラは人間のこゝろを告げる言コトの奥にあるもの、即ちこゝろのことであるが、その言が本心を示す場合と然らざる場合とを區別して本心をいふのであつて、このウラに合する、即ち眞意に違ひないのを卜ウラナヒ合と云つた。だからウラは眞事であり眞言である。之に眞と云ふ字も誠といふ字も採ることにしたのは猶ほ、コトワリを理とも義とも書いてゐる氣持と同じであつて、眞偽といふことが先づ正邪善惡といふかたちに於て意識せられたからである。かういふわけで我古傳説の構造も決して人間の知性を没却せんとする意圖を持つて作られあるものではない。否却つ

て理性を重視せること我が神話の如きはないと言ひ度い。印度の神話、支那の神話、北歐の神話、希臘埃及等の神話を見よ。そこに物語られる神々に非人間的色彩の如何に強くして、そのなせる事業に如何に怪奇荒唐の事多きか。これを想ひ浮べるに日本神話の著るしく人文的なるを思はざるを得ぬのである。

10

繰返して云ふがウラナヒといふ言葉だけを以てしても、神々の本性はマコトであるといふことがわかるのである。そしてこの場合のウラは本心であり中心である。漢字では忠といふ字がよくあてはまる。而もこの忠をタダシキと訓んだ。こゝに漢字採用時代の日本人が、その民族的素養として持つて居つた哲學的意識、道德的意識、或は人間觀世界觀とも言ふべきものを見得るのであつて、それは畢竟するに人間の本性はまことであり、正しきものである。そしてこれは天ツ神に於てその根源を見出し得ると、かういふものであつた。だから諸冊二神でもそのなされた事の結果がよくなかつたときには、天上に上つて太占によつて天ツ神の御意をうらなはれた。自然、天ツ神の御意は絶對的の權威を以て聽かれるのである。またその御告げも、如令ごと外國人に記される程の強き威力を伴ふて傳へられたのであつて、之を語、命、敎、勅、詔、敎、命などいふ言葉と文字とに表はした。此のノリが自然法とか當爲法とかの名を以て稱せられる事物と人事の間に流れ居り、或は流るべき理法をさしてゐることは言ふまでもないが、それをミコトノリとし、ラシへとするとところに特別な文化觀を看取すべきである。

そして祝詞イハコトといふことばもこれと關聯して考ふべきであるが、それは後説する。

こゝに引いた二神が占聞ウケミひなされた神が、單に天神アマツカミと記されてあるのみであること、及びこの少し前のところ、即ち二神に此の國を「修理固成ツクリカタマせ」と命ミコト以ちて詔ノリたれ給ひし神も天神とあるのみで、その御名が明してないことは、曾て和辻哲郎博士が言はれたやうに、神は單に神であらせらるればよいので、その御形は捉え奉り得ずとも、一切をしろしめし又生成せらるゝ底の限りなき存在の母胎であり、一切の生命と力と法則との根源であることを示すのであつて、此點恰もカミといふ言葉の原義によく合ふことを見るのである。そしてかういふ形なき天神のみにこのりによつて二神は修理固成といふ地上的事功をなされた。而も此の二神は藹神アヘであらせられるが天降アメりました神である。その御事業は所謂神話的表現にはなつてゐても、それには投影源としての人間の事業を考へないわけには行かぬ。だから男女の道もなされて御子孫もあり、御陵も傳へられて祖神として祭られてある。その上かういふ人間神はそれ自身にありても靈異クシヒミヤしき威ヒキの持主であらせられる。異しきは神カミしきと書いてもよく、靈クシヒは特別な知力といふやうな語感がある。だから此の類の神々の御意ココロも亦絶対的の權威あるもの、みことのみである。それが人間の生活の部面に出て來れば教となるのは當に然るべき所であり、そこでこの教命には絶対的に隨順するが利トクきことであり義コトダシでもあるのである。古事記によると速須佐之男命は御父伊邪那岐大御神の依ヨサし賜タマへる命ミコトに隨はれなかつた故に御忿怒イカガヒにふれて神やらひにやられたではないか。

同じ様なわけで、神の靈威を恐れかしくみ奉らぬことは、極めたる惡ワガしき能ノである。そして萬マンづの妖マギの原因を

なす。天照大御神は速須佐之男命がその大嘗聞食す殿に屎まり散らされても、酔ひて吐き散らすところしつらめといつて咎められず、又畔放ち、溝埋めをされても、地をあたらしくこそしつらめと言つて詔り直したまはれたが、最後に忌服屋に坐しました神御衣を織らしめ給ふとき須佐之男命がその頂を穿ち、天斑馬を逆剝に剝いて墮し入れられた時には、畏みて天岩展戸を開てゝさしこもりました。蓋し此の神御衣は大御神が齋き祀りませし神の御料であるから、天岩屋戸に入りましたのは全く神威を瀆されしことを畏みて忌籠りましたのである。即ちこゝでは須佐之男命の數々の行爲の中でも、神威を瀆されしことだけが悪しきわざであり、高天原は皆暗く葦原中國も悉に闇くなり、萬の神は狭蠅なして皆さわぎ、あらゆる妖禍が發つたのであつて、その故にこそ命は八百萬の神の讒で、千位置戸を負はせ、鬚と手足の爪を切り祓はしめて神遣らひにやられたのである。

この千位置戸は巨多の財物を徵收されることであるが、書紀によると、諸の神たちが罪過を素戔嗚尊に歸せられ、その科料として促め徴られたのである。つまり物品を以て罪を贖はしめられたのであるが、それが髮、爪を抜かしむるまで徹底したものであつたことが記してある。加之竟に逐降ひきとまであつては、事の重大なりしこと見るべきである。

一一一

神威を瀆したことを過惡として之に財産刑を課す。さういふところには私有財産制の存在も認められ、餘程高

度の開化社會の存在とが考へられるのである。事實神代といつても、そこに用ひられた器物類の名例へば白銅鏡、五百箇御統玉、天蠅斫劍、天鶴船、八重蒼柴籠、千尋栲繩、眞床覆衾、といふやうなものを舉げただけでも、そこには或程度進んだ工藝技術の存在さへ想はしめられるのである。だから日本の神代は決して原始未開社會のみのことなりとはしてならぬ。言ふまでもなく、そこに物語られる神々の御神格も亦高く勝れてましますのであり、それに隨伴して、人々が齋き仕へまつる、即ち畏み奉る態度も、單に恐れ慎しむのではなくて、之に歸服し敬仰し奉るのみならず、我が全身全靈を傾け盡して恭敬畏信し奉るにまで深められ擴けられてあるのである。まことに前述した御稜威内容の擴充深化と應同してゐるものと云つてよいであらう。

今さういふ神格擴充の經路をたづねて見よう。上代の自然神人文神等あらゆる神々をひつくるめた上で、皇祖にまします大神達を措き、所謂荒ぶる神、國神等の名に於てすべ稱へられてゐる八百萬の神の内、最も廣大尊貴に傳えられますのは大國主命(神)であらう。その御名が大己貴命(大名持神)、大物主神、大國魂神、大地主神、八千戈神、葦原醜男、伊和大神など、澤山あるばかりでなく出雲風土記では所造天下之神とさへ呼び奉つてゐる。そしてこれ等の御名がそれ／＼その御神格、別の看点よりすればその神威神徳の具體的顯現たる神功を詮はしてゐることは斷るまでもない。伊和大神とはその神靈を鎮め仰ぎ奉りし地名で、葦原醜男は蓋しこの地上に實存せられたときの渾名であらう。八千戈神は廣矛を以て廣大なる地域を平定して廻られた事、大地主神とは廣大な地域に互つて勢力の及びませし故に地主神と考へられありし事、大國魂とは國々の靈とさへ崇められてゐた事、大

己貴命とはその御名は呼び奉るもいと恐れ多く特定の限定した呼び名を超えた大きな存在であるといふ靈シシに威ケき神といふ事を表はすのであらう。だから普通には大國主命と申してゐたのであらうが、後にはその郷貫であつた出雲地方では、専ら神功神恩を稱えて、所造天下之神と景仰尊稱し奉つたものであらう。而してその神功神徳といふのは、國土の平定、毒蛇の退治、醫療禁厭の教示等があるが、最も強く印象されてゐるのは、邪神アノミカミ即ち「疎ぶる物」「根の國底の國より荒び疎ツトび來む物」などと謂はれた魑魅魍魎クシシの類を鎮ヤめ和ヤされる靈異なる威力と、「五百津鋤々を取らせて」自ら農耕の道を教へ示された厚生の功徳とであつた。それに天照大御神と高木神の勅ミコトノリに従ひて葦原中國を獻りて百不足八十垧手に隠モモラズれましたこともあられる。

こんなわけで、大國主命は出雲大社、大神神社、大和神社、氣多神社等の官幣大社を始め何萬といふ神社に祀られてましますのであるが、然し考へて見ると此の大神には色々の神が吸収せられ、従つて數多い神社の内には元來は違つた神を祀つてゐたのがあらしいのである。早い話が、大國魂神や大地主神には幾柱の方があらせられるであらう。出雲風土記には天降りましたとも記してある。だがかういふ事は從來個々の神社について精密な調査を行つた幾多の先覺に既に多くの發表がある事でもあり、こゝには冗言を省かう。

一一一

とまれ此の神が斯く普き崇拜を得らるゝに至つた所以は、皇祖天神のみことのりに聽從された忠誠と、邪神を

鎮めて國土を守護せられた威力と、農耕醫療によつて民生を厚うせられた功德との三點にありと思はるゝ。而も此の内で第二第三は見様によつては第一の内に含めてしまつてもよいのである。何となれば豊葦原水穗國は我子孫の治らすべき地なりと詔りたまふからには、第二第三の如き事功は、その治らす御仕事の中にあるのであらうからである。然らば此の國ツ神の崇敬奉齋さるゝ所以も一に皇祖天神に忠誠であらせらるゝことに歸する。そしてこれこそは、當に然るべき理であつたことに注意せねばならぬ。といふのはその時の勅は、汝が宇志波祁流葦原中國は我が御子の所知國なりといふのであつて、このうしはくは所領として私有すること、知らずは統治することであらうから、つまり皇權の傘下に統合せられたことである。而も此の場合獻上すべきを決斷せられたのは八重事代主神である。八重は美稱であり代主は知主、事は事件であるけれども、特に重大な、非常な、不可思議なことを云ふこと前述した通りであれば、此の神は重大な事件について正しき判斷をする叡知の神理性の神である。出雲國造神賀詞によれば此神の御魂は雲梯（今日の高市御縣坐鴨事代主神社なりといふ）に坐して皇御孫の命の御世を護りましてあるのであるが、その神こそ「思はぬを思ふと言はゞ眞鳥すむうなでの杜の神や知らさん」と萬葉にあるやうに人の心の裡までも見透す神と畏れられてゐた。だから後の世にも國家に非常な事件があるときは、此の神の出現があつて皇基を守られた。とにかく理性的な神にまします。がまた此の神と殆ど同じ徳と功とを持ちます神が高天原にもましますのである。それは思金神であつて、先きの勅命もまたそれを傳ふべき使神の選任も、天安河原に八百萬の神を集へて議りたまひしとは言へ、すべては此の神に思はしめられたとある。而

已ならず此の神は手力男神、天石門別神アマノイソトワケと共に邇々藝命御降臨の際には、天照大御神の御魂を招禱オカガませし勾魂イガミに副ひ降し賜ひし神であつて、特に「此の鏡は専ら我が御魂として吾が前を拜イくが如くいつきまいれ、次に思金神は御前の事を取り持ちて爲政マツリたまへ」(淵マラシタマへは宣長による。眞マコトはマツリゴトヲナセと訓めり)とのらせられ、佐久久斯呂伊須受能宮に拜き祭るとある。まことに重い神であらせらるゝのであるが、思金は固より書紀にある思兼の字が正しく當つてゐると申すべきであらう。或は八意思兼神ヤコホと申し、とにかく思慮の神にますべきは勿論であつて、事代主神と似てあらせらるゝ。自然かういふ神に特別の御委任をなし給ふ天照坐皇大神の御政治は最も理性的なもの、道理に基くものであらせられるのであつて、知らずは治すとも書き、おさめ給ふことであるが、そのおさむるには治、理の字をあてゝある。理は筋目、理性にもとつき道理にのつとる事功の實現が天祖肇國の御精神であらせらるゝこと領すべく、それは神武天皇によつて、鴻荒草昧の時運にも正しきを養ひ以て西偏に治らしたと宣はせてある。乃ち語をついで皇祖皇考は乃ち神乃ち聖にましませりと仰せられし所以であつて、此の神聖の字、之をカミとも訓むが、それは恰も孟子に「大而化之、之謂聖、聖而不可知之、之謂神」といふにも當るのであつて、我が古神道に見る精神の雄大崇高、至れるものなることを覺ゆるのである。

一二

以上の論述によつて私は、皇祖天神の御本意が理性道理によるまことの實現にあらせられ、それは超凡靈異な

る威力その中には限りなき聰明さと道德性、特に仁恵がこもつてゐる御稜威なるものに於て、我々民草が仰ぎ奉り得るのであつて、その勇愛智聖かね備へられた崇きものに打たれて、思はず知らず心の底から額き拜がむ態度が、すでに記紀拾遺等によつて示される掛けまくも畏きといふ讚辭タタヘゴトの意味合なることを明にしたつもりである。然り、之を我々は神威なるものに於て仰ぎ奉るのである。それ故に此の事を神々の御神格の向上といふ事實とも見た。別言すれば諸神内諍の展開である。そして此の事を大體古典の語文的表現にたづねたのであるが、今少し具體的の事實を探つて、神々を齋き拜む人の心の變化を如實に見ることにしよう。

崇神天皇の詔に、惟れ我が皇祖、諸の天皇等、宸極アマツヒツキを光臨シロシメすことは豈ヒトハシラ一身の爲ならむや、蓋し人神を司牧トシへて天下アマを経綸ツサめ給ふゆゑなりといふのがあらせられる。この人神を流布本にはヒトと刻んであるけれども、之はヒトカミ或はヒトトカミと讀むべしとする説がよい。そして此の場合の神は、最もよく古事記倭建命の條に、東西の荒ぶる神及び伏フスはぬ人等、又は山川の荒ぶる神及び伏フスはぬ人等とある神に當るやうであつて、山の神、坂の神、沼の中に住める神、渡の神などにその實例を見る。そして此等の神は概して人間生活に害惡を加え、何かといへば風雨を不順にし疫病をはやらせ、道行く人に毒氣を吹きあてるのである。だからさういふ神々を或は齋ひ鎮め、或は和めやはし或は伐ち殺すことは、まことに測り知れざる民生の幸福になつたことであらう。崇神天皇は實にかういふ御事績を最も多くのこされし方であつて、かの大物主神の崇を鎮めんために大田田根子命を探して大神オホカミ神社を創めたまふた。天照大御神と倭大國魂神を皇宮内より遷して笠縫邑に祀り、更に倭大國魂神は長尾市命を

して大倭神社に祭らしめ給ひしこと、及び別に八十萬の群神を祭り、天社國社を分ち神地神戶を定められしことなどは言ふにも及ぶまい。而もこれらは全く災害をとゞめ、黎元を愛育はれん御心からであつて、そのため風雨時に順ひ百穀豊ち足り天下太平であつて、之を天神地祇共に和亨てと萬民が壽いだのである。

是によつて天皇が神祇を敬拜遊ばした所以は極めて明瞭であつて、此事は古典を緝けば隨所に仰がれる事實である。實際上代征戰の物語は王化に浴せざる蝦夷熊襲、王命に服せざる土蜘蛛、國栖の類を征伐せらるゝのみでなく、到るところに蟠屈して國民生活の禍害をなす邪神惡鬼の類を鎮撫なさるゝことも大きな目的であらせられた。日本武尊の御征伐の物語はその大半が、吉備の穴濟の神、灘波の柏濟の神皆害心あり、以て毒氣を放ち路人を苦しましむ、並に禍害の藪たり、故れ悉くその惡神を殺し並に水陸の徑を開きたり、といふやうな趣に記されてあつて、よく此の邊の消息を傳へてゐるのであるが、古風土記には之に類した古傳がいくつも記されてある。一例として引かんに、肥前神埼郡には昔より荒神があつて、往來の人多く殺害されてゐたが、景行天皇巡幸の時和平たまふた。それ以來更に悚がないといふが如きである。とにかく荒ぶる神が諸所にあつて、往來の人に危害を加えてゐたのである。そのため弟橘姫命の如きは御身をさゝけられたことまで傳えられてある。

一四

これ等の史實を顧ると、實にありがたく、古典にも至徳とたゞへてあるのであるが、かゝるまつりごとをなし

給ひし御わけは、民に利ありといふのみではなく、やはり義ヨトハリまさきに然るべしと思ほしたからであらせられる。播磨國神前郡生野はもと荒神があつて、やはり往來の人を半殺にしてゐたため死野といはれてゐたのを、應神天皇が改めて生野とせられたといふ説話はここに連想さるゝが、このやうな例は民間にもある。即ち肥前國佐嘉郡の山にあつた荒神は往來の人を半死半生にした。茲に於て縣主等が祖大荒田占問ひしに、土蜘蛛の大山田女狹山田女の二人云へらく、下田村の土を取つて人形馬形を作つて祭らば必ず應知あらむと。大荒田其の辭の隨に此神を祭つたところが、神之を飲けて遂に應和めり。大荒田云へらく、此の婦は實に賢女なりと、とある。播磨國揖保郡枚方里神尾山には應神天皇の御代出雲の御蔭大神があつて、毎に行人を遮り半死半生にした。伯耆の人小保弓、因幡の人布久漏、出雲の人都伎也の三人が之を憂へて朝廷に申したので額田部連久等を遣して祭らしめられた。時に屋形を屋形田に作り、酒屋を佐々山に作つて祭り、宴遊甚だ樂しみきとある。これ等の傳説には和めるころが強く出てゐて道理の理念は強く出てゐないが、次の三例はさうでない。

一つは仁徳天皇紀十一年冬、灘波の宮の北の河の澇を防がんとして茨田の堤を築きたまふ時のこと。是の時兩處の築(比古婆衣に云く)斷間の誤字なりありて壞れて塞ぎ難し、時に天皇の夢に神ありて誨へて曰く、武藏の人強頸、河内の人茨田連衫子の二人を以て河伯を祭は、必ず塞ぎ得てむと。則ち二人を覓めて得たり。因て河の神を祭る。爰に強頸泣き悲しみて水に没りて死にぬ。乃ちその堤成りぬ。唯衫子は全匏兩箇を取りて塞ぎ難き水に臨みて投入れて請みて曰く、河神崇りて吾を幣とせむとす。是を以て今吾來れり。必ず我を得んと欲せば是の匏を沈めてな泛ばせ

そ。則ち吾眞の神と知り親ら水の中に入らむ。若し匏を得沈めずば自ら偽の神と知らむ。何にぞ徒に吾身を亡さむと。是に於て飄風忽に起りて匏を引きて水に没む。匏浪上に轉ひつゝ沈まず。滄々泛つゝ遠く流る。是を以て衫子死なすと雖も而も其の堤成りぬ。是れ衫子の幹に因りて其身亡びざるのみ。この傳説には明瞭に人間が神に眞偽の別あるを思ふて、その命令を批判する態度が出てゐるが、次のになると神は正しきこと、善き事を以て民生を厚くし幸福を恵むべきものなりといふ主張と確信とが鮮かに出て來るのである。

それは常陸風土記行方郡椎井のこと、繼體天皇の御代に箭括麻多智といふ人あり、郡より西の谷の葦原を開墾して新田をつくつた。此の時夜刀神相群り率ゐて悉く來り、左右に防障して耕佃せしめなかつた。是に於て麻多智大に怒り甲鎧をつけ仗を執つて打殺し驅逐して、山の口に至り、杭を標て、塚の堀を置き、夜刀神に告げて曰く、此より以上は神地たるを聽す。此より以下は須らく人に田作らしむべし。今より以後吾れ神祝となつて永代に敬祭せん。冀くは祟る勿れ恨む勿れと。社を設けて祭れり。即ちまた耕田一十町餘を發き麻多智の子孫相承けて祭を致し今に絶えず。其後孝徳天皇の御代に至り、壬生連麻呂其谷を占ひて池を築かしむるの時、夜刀神池邊の椎樹に昇り集ひ、時を経るも去らず。是に於て麻呂聲を擧げて大言して曰く、此の池を修めしむるは要するに民を活かさんと成り、何の神誰の祇ぞ風化に従はざると。即ち役民に令して曰く、目に雜物魚蟲の類を見ば懼懼するところなく盡く打殺せよと。言ひ了りしその時神蛇避り隠る。所謂其の池は今椎井といふものこれなりとある。夜刀の神は谷の神で蛇をいふのである。全く以て世の中の一變したことを思はしむる傳説と云ふべきであら

う。尙次を見るとそれが道理の意識の覺醒に原因することがわかる。

といふのは、此も常陸風土記久慈郡賀毗禮の高峰のこと、此山に天神あり、名を立速日男命と稱ふた。又の名は速經和氣命。もと天より降つて松澤の老松の八俣の上に坐した。神の祟いと嚴かにして人あつて向つて大小便を行るときには災を示し疾苦を致すので、近側に居る人が毎に辛苦した。依て狀を具べて朝廷に請うた。そこで片岡大連を遣して敬祭せしめ祈みて曰く、此處に坐しては百姓の家に近く朝夕穢臭し。理まさに坐すべからず。宜しく避り移つて高山の淨境に鎮まりたまふべしと。是に於て神禱告を聽き、遂に賀毗禮之峯に登る。其の社石を以て垣をなす。中に種屬いと多し。並にくさぐさの寶、弓、棒、釜器の類皆石となりて存れり。凡そ諸鳥經過するもの盡く飛避けて峰の上に當るものなし。古より然り、今も亦同じとある。だから神々の威力はいかにいやちこくても道理の前にはかなはせられぬのである。

一五

以上の數例によつて、神々の神格の向上といふことは殆ど遺憾なく説明されてゐると思ふが、それについて特別に見のがしてはならぬ一事は、かゝる文化的事象でも常に朝權の發動といふ事實のもとに行はれて來たといふ事である。即ち天皇御親らの御詔か、その宰たる官吏の請み申すによるか、何れにしても朝廷に關係してあつて、その御政治であらせられることがわかる。司牧人神といふ御ことばはまことに輕からず、かうして臣民衣食の道

のみならず、心霊の世界に於ける安定と向上までもが、御宇天皇の御政として恵まれて來たのである。かういふ事實は、全く、それ等すべての神々の靈威にも増して廣大高強なる御稜威の恩膏であつて、これは畏みも畏まずには居られない恩徳であるのであり、我が古典は、それを素直にさうと感受して來た國民の精神生活上の推移をよく傳えてゐることを傳えてゐるのである。

ところで、天皇の御政として神々の性格も向上せられ、そのために土の始めにありては、磐根、樹立ち、草の片葉まで語問ひて、蒼蠅なす騒ぎてありと言はれし位、心霊の世界に混雜、不安、動搖の漲つてゐた大八洲が、こんな立派な國になつたのである。この事はそのまゝ、天皇が最強最賢最尊の神であらせられ、その靈威は比喩なき力を持つてゐられ、ゐられたことを露はに示してゐることを思はねばならぬ。何となればかゝる無数の惡しき勢ひしけき神々を、攘ひ、言平け、和し、鎮めて、豐葦原水穗國を安國と平けく知ろしめさんことは、是なくては出來ぬことであるからである。そして之は言ふまでもなく、皇祖天照大御神の御よさしのまゝに、天日嗣の御位に即き、現御神大八洲所馭からと仰がれる。天照大御神が日神にして祖神、且つ徹底的に農織を重點とする文化神、武威叡智をも兼ね備え給ふ神聖にましますことは、すでに幾多の研究もあること故、こゝには詳論を省くが、とにかく肇國の古へに早くもかういふ中心となる神祇思想が我が國民社會には出來上つてゐた。そして爾後の歴史は如何にして、此の最高神を中心とする高天原神統の中に、歸伏はぬ人々のおのゝ齋き祭れる神々、山川に群る惡振る神たちを包攝同化するかといふことであつた。而も此事たるや、王化けに習はしむるとか、教

化けるとか、朕が憲を知らしむる(崇神天皇十
七年の詔)とかいふ御精神の實現であらせられたことを忘れてはならぬ。だから之を服従はしむと謂ふのである。上古の世各氏族それ／＼祭る神があり或る神を齋き祭る範圍が國と言はれるものであつた。だから服従するといふことは、我が祭る神をすてゝ、對手の奉ずる神を祭るやうにするか、さもなければ我が奉ずる神を對手の神の從屬的位置につけて祭るかすることに外ならぬ。どつちにしても對手方の神に奉仕するといふことになるのであつて、祭るから來た歸伏である。これ予が古代の御征戰を以て、王命に枕棹する熊襲蝦夷などを討伐さるゝのみでなく、所在に蟠居してゐた荒ぶる神などを和め鎮めらるゝことでもあると言つた所以である。

一六

かういふ風にして八十萬の群神が悉く皇化の中に包み込まれる。饒速日命の系統をはじめて高天原より天降りる數々の神々、出雲系統の如き大なるものを始め更に多かりし地祇の神々、さては歸化人の祭り居りし數多の蕃神、それ等の中には山川草木風雨雷電龜鳳蟲魚等の崇拜に起原をもつ自然神系統のものも澤山ある。然しかゝる類の神々でもその惡威をとゞめ之を轉じて民の利をなし國土を護る神にかはられる。さういふ靈徳の實現が古神道のもつ理念であつて、延喜式におさめられた祝詞、その中でも龍田風神祭の祝詞にはそれがよく出てゐる。志貴嶋に大八嶋國知しめしゝ皇御孫命(崇神天皇)の遠御膳の長御膳と赤丹の穂に聞し食す五穀(イワツクサツクナツクサ)物を始めて、

天下の公民の作る物を草の片葉に至るまで成さず、一年二年に在らず、年間なく傷へる故に、……物知り人等のト事を以てトへども出づる神の御心もなしと白すを聞食して、皇御孫命の詔はく、神等をば天社國社と忘るゝ事なく、遺る事なく、稱辭竟へ奉ると思し行はずを誰の神ぞ、天下の公民の作りと作る物を成さず傷へる神等は我が御心ぞと悟し奉れと誓ひ賜ひき、云々。かゝる天皇の熱誠なる御祈請に感じ、神が大御夢に出でられて、我が御名は天御柱命國御柱命であるが、吾が前に御服は明妙、照妙、和妙、荒妙、五色の物、楯、戈、御馬に御鞍具へて龍田の小野に吾が宮を定め奉りて、吾が前を稱辭竟へ奉らば、天下の公民の作りと作る物は五穀を始めて草の片葉に至るまで成し幸へ奉らんと悟し奉られたのである。この縁故で龍田神社は創建せられ、有名な龍田風神祭も始つたのであるが、此の社が歴朝いかに厚き尊崇を受けましてあるかを思ふと、悪神を變じて善神となされる程の御靈徳の偶然ならざるを思ふことが出来るのである。

祝詞にはいつも皇神等の前に申さくとある。此の龍田の神も皇神と呼ばせ給ふ。皇神はスメラ神で、勝れた神、高い神といふ原意であらうが、上説の如き看點からは天皇が特別に尊敬あらせらるゝ神と解すべく、さらに云へば天皇の靈聖なる御權能の中に參同せられます神といふ風に考へるのが適確であらう。とにかく日本の神々はいかにして物でも鬼でも天皇御聖徳内のよきたかき存在に變化し、皇祖天神を中心とした神統譜の中に入りますのである。雄略天皇紀に葛城の一事主神が言詞恭格しく天皇を送り奉ることあり、また小子部栖輕に三諸岳の神を捉えしめ給ふことがあるが、推古天皇紀には一層面白い記事がある。即ち天皇の二十六年河邊臣某を安藝國に遣は

して船を造らしめられた。某山に至り好き材を覓め將に伐らむとす。時に人あり曰く、雷霹の木なり伐るべからずと。河邊臣曰く、其れ雷神なりとも豈皇命に逆きまつらむやと云ひて、多に幣帛を祭りて人夫を遣はして伐らしむ。則ち大雨ふりて雷なり電す。爰に河邊臣劔を案りて曰く、雷神入夫をな犯しそ、當に我が身を傷れ、といひて仰ぎて待つ。十餘霹靂すと雖も河邊臣を犯すことを得ずと。即ち小さき魚に化りて以て樹の枝に挟まれり。即ち魚を取りて焚く。遂にその舶を修理りつといふのであつて、普天率土、山界萬靈まで皇權の中に匂擲さるゝ有様がよくわかると思ふ記事である。

一七

だが此は決して神祇を輕んじたといふことを物語つてゐるのではない。どの話にも必ずあるやうに、幣帛を厚く供へ嚴かに齋ひ祭ることはゆめ怠らぬのである。特にそれは崇神天皇の御行實に拜せられ、天皇七年二月大物主神をたづね祭らせ給ふときでも、災害のしばゝあるは朝に善政なくして咎を神祇に取るかと仰せられて、神淺茅原に幸し八十萬の神たちを會へて卜問ひしたまふた。そして御教のまに々々祭祀られても事に於て験がないと、更に沐浴齋戒して殿の内を潔淨めて祈みて曰く、朕れ神を禮ふこと尙未だ盡さざるか、何ぞ享けたまざることとの甚しき、冀くは亦夢のうちに教へて以て神の恩を畢したまへとて、遂に一夜夢中に一貴人の來臨を得られたのである。こんな御心であらせらるゝ故に、神はこゝろよく天皇のうけひに答えたまひ、天皇は亦之を皇神と

まで稱辭申して重く祭られたのである。それ故に神々が自然神、邪神、暴神から人文神、祖先神、守護神とだん／＼變つて來られたことは、同時にその靈威が一層清められ崇められたこと、一言すれば神格の向上であつたとまさに領すべきではないか。

神武天皇以來神祇を敬祭することは、國家の最も重き御仕事であらせられ、政治もマツリゴトと呼ぶ國風なのであるが、その神々は八百萬と申す程無數にあつても、かくしてすべて皇權内に攝取せられた皇神たちになすのである。古典にあらはれたる神祇の記事や、神祇志料等神社祭神に關する文獻を見れば自然神系統と見るべき神々の甚だしく多數なるに今更の感を促されることであり、神話の見方の如何にもよるのであるが、中澤見明氏の如きは「國史に就て見ましても、神武天皇以來平安朝の頃に至るまで、未だ曾て史上實在の人物を神として神社を創立したことは更に見えないのであります」とさへ言つてゐる。かくて早い話が延喜式神名帳の宮中にまします三十六座の神々にあられても殆どさういふ種類の神と拜祭される。だが御祭事の中でも特に重き祈年祭、月次祭の祝詞を看よ、これ等の神々はすべて重き皇神にましまし、その上大和の六つの御縣にます神々、飛鳥、石寸、忍坂、長谷、畝火、耳無諸山の山口に坐す神々、吉野、宇陀、都祁、葛木等の水分（みづり）の神々たちまでもすべて皇神として伊勢に坐す天照大御神に次ぎ、併せて祭らせ給ふのである。これひとへにこれ等の神々の靈威靈徳が、天照大御神の日眞名子にまします皇御孫命の御代を安らげく平らげく守り且つ民草のいのちの綱たる五穀の豐穰を招來するからであるが、然し後者とても民草の食料は皇祖天神のことよさせ給ふところなる故に、これも

皇御孫命の御こゝろを奉承せられるのであつて、通じて言へば、皇祖天照大御神の御稜威を壽ぎその天業を翼賛し給ふ諸々の皇神たちに感謝奉賽祈願せらるゝ御こゝろを拜察するのである。そしてかくの如く天地自然の目に見えぬ恰も無心の恩徳にまで感謝敬畏してあらせらるゝところに、我が神祇祭祀の基本的なる一特質を看取しなければならぬ。

一八

こゝにも言ふ如く、神々がいかに人文的に理性化され、文化的の内容を加えましても、やはり自然神としての要素も強く保持しますことは、何といつても上代の神祇觀が自然に根ざし、精神的に非常な悠久さを持つてゐるからであつて、それほど我が神道思想の根底の固きを思はせる。これが儒佛渡來しても決して日本人がその信仰の根幹を失はなかつた所以であつて、他國人が後代流入の信仰によつて全く信仰の根幹まで變置したのと根本的に異なるものありて存する所以であらう。そしてかういふ基本的性格によつて原初肇造の時代に夙に祖神と統一神の位に上りました天照大御神は、歳月の移るに隨ひて、ます／＼その神格を擴め、崇め、深め、淨めまし、それに伴つて神威はいよ／＼普く輝き徹りましたのである。

その過程ともいふべきものをうかがひ得る具體的なものとして古典記載の説話の内容は勿論、その表現の形式また大御神、御祖神等の言葉にも注意したのであるが、特に祝詞に出てゐる皇吾睦神漏伎命神漏美命といふ言

葉には深義を認めたい。とふふのは神漏伎神漏美は神といふ音を重く延ばして云ふのに男性女性の標音たるキとミを添へたのであつて、古語拾遺には高皇産靈神、神皇産靈神を申すとしてあるが、或は伊弉諾尊伊弉册尊をさし奉ると見る人もある。然しよく用例を考へると高皇産靈神と天照大御神とを申すやうに思はれ、それに皇吾陸の字を冠してあることは、いかにも御親神として親近濃厚なる情愛をこめられてあると感ぜられ、恰も天照大御神よりは天皇を皇御孫命と呼びめでたまふにたぐうてゐる。かたぐゝそこに天照大御神がどの大神たちにも増して、皇御孫命と深く厚く結びつきて坐すを覚え、それは天照大御神が最高最貴の祖神と仰がれ給ふ事情としつくり合ふのである。だから此の神は最も重く敬祭せられますので、祈年祭、月次祭祝詞にも辭別きて伊勢坐す天照大御神の大前に申さくと稱えてある。その上神ながらといふことば、それは孝徳天皇紀に初めて見える惟神といふ二字の訓ませとして傳えられてあるが、萬葉の歌にも澤山出てゐるから、古くよりある言葉と考へられる。而も山本信哉博士の説によると神ながらといふ時の神は天照大御神御一柱をさし奉るといふが、自分も少くもかの大化二年の詔の場合には然りと判断する。尤も最近コレカミと訓むべきがよいといふ説も出てゐるが、讀方はいづれにせよ、此の場合の神は天照大御神をさし奉ることは信じてよい。然らば之も皇吾陸神漏伎と同じく特に天照大御神を重く貴く近く仰がれての御言葉であつて、いよ／＼以て諸の神々の内で最尊最高の絶對的神格を持ちますに至つたことを察し得る文字ではないか。かういふ次第で古神道の神祇觀が、夙に一神教的形態をとるやうになつてゐたその統一性に於て、自分は古神道が大乗佛教と通ずる一つの契機を見得べしとするものである。

一九

だがそれは此の場合措き、たゞ天照大御神を至上神とし、その周圍に家族的血縁の連繫を以て數多の神々を、それらゝの靈徳に於て考へてゐるのが、わが古神道の神統譜であらう。勿論それも古事記と日本書紀、古語拾遺の間には多少の相違もあり、其他舊事記、或はそれらゝの神社の古傳などによつて補はるべきところもあるが、然しその大系は確立して居り、廣大整然たる組織なることは言ふまでもなく、平田篤胤大人の神代系圖、矢野玄道翁の顯幽分界圖説などは之を簡表にしたものである。

それにつき天照大御神のましました高天原が古來學者の考究論議の問題とされてゐるが、予を以て見れば、これは深く論らふに足らぬ事である。神話は元來古代人の長き社會生活の間に生長して來た歴史的藝術的創作である。だからその中には地上に於ける現實生活の痕跡もあるが、それは何としても投影的なものである。それよりもむしろ觀念的要素を重く見て、古代人の精神傾向、思考の特質、表現の態様等について考察すべきであらう。して見ると地上に求むるならば、肇國時代の皇居のありし處であつて、それはどこでもよし、たゞさういふ地上の現實生活を天上の世界にまで揚げ崇めて考へた古代人の、人間を人間とせずに神とし、その行實事業も神の專功として語り傳へたその氣持と、その氣持を起させた原因事情等を省みることが當面の課題である。

そんな見方からすると、天照大御神は肇國時代、それは時間的には所謂鐵器時代に入つてからであらうが精神

的には悠遠の昔である。その悠遠の古へに我が國の君主にましました女性でおはしたであらう。而してあらゆる美德を兼ね備えられ、その善政威徳は當時の地上全體に普く及んだ。殊に聰明、武勇、仁慈にましまし、敬虔にして神を齋ひ祭り、農耕、蠶蠶の業も躬らなされて、民生に衣食住の道を教へ、且つ力と徳とを以て四方を綏撫して國土を擴張し、皇子皇孫遠綿として萬世不朽に傳え、思慮をつくして臣民の生活を開明されるやう、又民は子として之に仕え、依つて以て君臣一家眞實の世界の完遂に努力すべきであることを躬を以て教へ諭された。それ故に後代此の方を最貴最親の神として齋き祭らるゝことになつた。先づかういふのが傳へられた歴史的事實であらう。而も此の歴史事實の崇敬は自らにして當時の日本民族が懐いてゐた世界觀、それは自然界人間界を通じての彼等の體系的な解釋の上に形作られてゐるのであるが、その世界觀にもとづく民族信仰とその説話とが附加せられて、日神たる性格を強く持たせらるゝやうになつたし、これに伴ふ説話の變改は古代人の思考の特殊なる藝術性によつて、天照大御神とその神話とに創り上げられたものと思ふて然るべきであらう。

天照大御神はかくして日神となられ、一旦の隱退、天石屋の御籠りはあつてもまた出現、六合を照徹して人間歡喜の本源となり給ふ。御名も大日靈貴オホヒルメノミケ、天照大日靈貴のヒルは晝であらうし、神樂歌に豊岡姫と申すのも朝日が岡から昇つて來るあの清々しさ、鮮かさ、美しさの中に御姿を拜まれるとしたものであるといふのが古傳である。また神功皇后三韓御征伐のときには檀木ツキノキ嚴之御魂イジメノミタマ天疎アマス向津ムカツ媛命ヒメノミコトと名乘まして現はれ給ふた。高天原よりは遠つて隔つてゐる武庫の湊に齋ひある神籬の榊の木に降つて來たと仰せられたのであらう。こんな風で永遠、

不死の生命を持ちまし、常に在して皇御孫命の護となつてあらせられるのである。従つて崩御の傳へもなく御陵の記載もない。瓊々杵尊を天降りさせ給ふときには、御自ら招ぎし御鏡を授けて、これを吾が御魂として齋き祭れと仰せられた。招ぎしの意、御魂を禱り降して鏡に憑けられるのであつて、我が上代に天日の靈を鏡に招禱する祭儀があつたのであらうことは田中治五平氏の所論である。また神の御衣を織らしめて神を祭り、新殿をつくつて新嘗を聞食した。これ等の神はどんな神であらせらるか明記してないが、これ恐らくは穀物の御靈なる御饌の神と、生命の本源にます産靈の神であらせられたらしいこと、これ亦田中氏の傾聽すべき所論であるが、自分は今天岩戸別神や思兼神等も加えて考へたい。御饌の神は豊宇迦賣神で、今外宮に祀られおはす。産靈の神はいふまでもなく高皇産靈神、神皇産靈神であらせらるゝが、此の二神は御同體であらせらるゝであらうといふ説が多い。そして高皇産靈神は古事記に高木神とも申してある。高き木に天降りついてゐましたのである。天岩戸別神は櫛磐臈、豊磐臈命と申し御門の神である。これ等の神々の信仰は古代よりあつたのである。

大日靈貴等が最高至上の大御神として、御自分に奉仕せらるゝ神を祭らしめ給ふこと、而もそれは非常な敬虔な御心持で長みて遊したとあるが、さういふことは、いかに勝れた御徳で、無私澄明な御心にあらせられたか。まことに仰ぐも尊いことである。そして生々化育の高木神と姻戚の縁を結び同じ御心で皇御孫命の御世を壽ぎ護り給ふ。天石戸入も神機殿が穢されたので神威の程を長みましてゝあるから、如何に清淨を重んぜられたかを知り得る。その淨きは氣善きで、氣は物質とその活力の本源といふやうな意味である。永遠に發展してやまない日

本の生命に對する信仰がこんな形でうるはしく現はれてゐるのである。だからさういふプロセスな明るさといふものを伴つた清淨さといふものは、物の本體、心の當體を直接突くのであつて、それがまことであり、清明アハカき心ともいふのである。眞の清淨は絶對的の靜澄境でなければ得られず、そんな靜澄の境は心に雜物が混じ塵埃が翳つてゐては到り得ぬからである。そしてかゝるまことの境には道理がはつきりと露出するのである。

110

伊邪那岐伊邪那美神以來日本人は神のみこゝろを聞き、みことを奉ウケテマフつて生きると共に、之を祭ることを最も重しとして來た。祭りの義はいろ／＼の説もあるが待つといふ言葉より出で、神の來臨を待ち奉るのであるといふのを正しいと思ふ。がさてその神は高山靈峰河海等をうしはく神、神威赫々して動もすれば崇られる神、いろ／＼な幸福を恵み、穀物を穰らせる神、祖先の御靈で子孫を見そなはず神など、考へ來れば、之を待ち奉る氣持もいろ／＼のものがあつて、時處による變化もやむを得ない。だが通じて見れば所謂邪神アヤカシ、荒神等はこれを齋イハヒひ鎮め和すのであり、産業神、祖先神、保護神等には祈願し感謝し、又は壽ぐのである。そしてその仕方は齋場をしつらへ、神籬ヒモロキをたて、神を迎へて御饌ミケを供へ幣帛ヒナゲラを獻り、祝詞を申し、神樂を奏し、直會ナラヒをいたゞくに終るのであるが、その始終を通じて身心を清淨にし、謹嚴、靜肅、敬虔の念に滿ち神に相見し奉る態様を保つてあらねばならぬのである。これ即ち神が清淨を好ませ給ふからであつて、禁忌齋戒等はこゝの爲の必然的な附屬行事である。

ところで古代に於ては、何といつても物鬼モノノケの類を鎮め、荒神を和めることが多かつた。神祇令にある鎮火祭、鎮花祭、道饗祭などは、支那傳來の思想が多分に加はつてゐて古神道の精神を見るにふさはないから省いても、廣瀬大忌祭、龍田風神祭には農耕を祈願するのと風雨疫病を攘はらふのと二つの意がある。鎮魂祭に至つては最もこの端的なもので、朝廷では猿女君氏と物部氏が奉仕して來たのであるが、こんな祭は一般民間にもあつたものではあるまいか。延喜式祝詞にある遷却ウツルカス崇神祭が崇神天皇のときに起源をもつと云はれるのは大神オホカミの祭などをさすのであらう。これも民間に澤山あつたことであらうし、さういふ時の祝詞は白石光邦氏の云ふ如くより高き靈威を持つた神の御名を出し、その靈徳をたゝへて、それ等惡神をひるませることになつてゐる。然しこれはやゝ後に出來た形式であつて最初はやはり荒神に幣帛を奉り之を和めることが普通であつたらう。尤も前者は鎮魂祭の如く或る呪物を振つて、そのくしき靈力によつて攘鎮ハシメシヅメめる事から出て來たと見るべきであらうから、その意味で起源は古い。そして此の呪物を振つて或る靈異なる威力を願ふことは非常に盛に行はれてゐた。弓、劍、棒、玉などすべてこれであり、淤煩鉤ヌボチ、須々鉤スズチ、貧鉤マゼチの如き海幸山幸の呪言もその類であらう。

さういへば、かゝる呪術は古代人の生活に非常な重要なものであり、それは言語の上では詛戸トコヒ、忌詞などいふ名で残つてゐる。天津奇護言アマツクサシヘヒコトは壽詞ユコトと言はんが如きものであらうが、祝詞といふ言葉もこれと類似性を持ち、告ることであらう。トは事戸、屎戸、咀戸などゝあるトで、呪的效果をもたらずところの或る種のしくみを言ふのであるらしいのである。とにかく或る種の呪術によつて物や荒神を攘ふことは古代人にとつては非常に大切なこ

とであり、内侍所御神樂の場合に人長が軾シキを三度蹴るのもその場にうよくする物鬼を鎮める所作であること、相攘に於て四股を踏むと同じである。そしてこれ等は皆古い起源であらうと思はれる。

こんな點から祝詞を見ると、「御名は申して」「稱辭奉る」「稱辭竟へ奉る」とあるが、これぞ威靈いやちこき神の御名を申すことは、その威力の發動を招オケぎ奉ることであり、それだけで物鬼精靈の類を攘鎮めて活動せしめぬ。云ひかへれば世の中を平らけく安らけくする効果があると信ぜられてゐるからである。而してかゝる呪的信仰はどここの民族にもあり、印度民族の陀羅尼は全くそれである。それが開明したものになると稱辭といふものになり、それを遣すところなく申上げるのを竟へ奉るといふ。これ經文を讀誦する如きものにはあらずや。

二二

然しこれはまだ極めて原始的の幼稚な信仰の殘影を物語るのであり、すでに開明された神格を持ちませる神々、特に最高至上の普遍的神格を持ちました天照大御神に對し奉りては、違ふ形、即ち前述の祭が行はれ、それに申し上げる祝詞は祈願か、報謝か祝福かであるのである。即ち疫病の終息、風雨の順調、穀物の豊穰、子孫の繁榮、天下の太平、征戰の勝利、かくの如きことは常に希求せられたところ、勿論民間一般にてもその祈願は盛に行はれたのであるが、朝廷に於ては天下知ろしめす大君として如何ばかり強く念じたまひしことか。それはこゝに一言も贅せずしてよからう。

而してかういふ場合には厚き奉幣があつて祈願を遊ばすのであり、民間の行事もこれに類してゐるのであるが、その時申上げる祝詞は勿論強烈な願意を述べらるゝものもある。だが然し既に敬虔の至情に徹し、忌み淨まはるることによつて神の御心に叶ふやうな境地に達したものの、即ち私心を去り誠心になり切つたもの、道理と一枚になつたものにとつては、さういふ強烈な嘆願の態度に出でずとも、既に善事をすゝめ民の利をはかり、子孫を保護するといふ性格を明示しましてあらせらるゝ神の御心を信じ切つて、平明清白な心持で水の低きに流れ雲の風と共に行く様な心持で願意を聞え上げ、却つて神の恩徳に感謝感激しある心情を申せばよいのである。そしてかういふ趣きは祈年祭、月次祭の如き重き御祭の祝詞に鮮かに出てゐること、山田孝雄博士の示さるゝ通りである。

之が一層進んで來ると神の御徳を壽コトホぎ祝イハひ奉るのであつて、やはりこれによつてその恩賚はめぐまるゝ。皇御孫命の御世を手長に八千代にと壽コトホぎ奉るのが中臣祓や出雲國造神賀詞であるが、之は同時にわが祖神の功業をのべ、それは皇祖天照大御神のみことによることであつて、またその祖神の命によつて、今現御神と大八島知食天皇命の大御世を天地日月と共に安らげく平かならんことを禱り申すといふのであつて、如何にも天皇は天照大御神と御一體にましますといふ信仰の上に立つてゐるを思はしめる。

かくして永遠の生命を持ちまし萬神の上に中心最高の地位を占め給ふ天照大御神とその御現身にまします皇御孫命即ち天皇にましますとの國民的信念、それは古神道によつて開展せられてゐるのであるが、その信念の上に天壤無窮といふ日本國命の聖詔はいよゝ堅きを加へて萬世を貫きつゝあるのである。

天地自然と人間とを同類に考へ、眞事を以て眞言に通じ、之を忠マコトといふ道徳性に於て最初に看取した上代日本人は、天つ神への絶對的隨順、その顯神ウツシカミであらせられる天皇への忠誠がそのまゝ、民生の幸福であることを體で知つてゐたのである。そして誠こそはまさに宇宙の自らなる基本的精神でもあり形相でもある。このまことと一枚なる處、豈生命に限界あらんや。天地と共に窮りないといふ我國のいのちはこれ亦自ら當に然るべきものであり、それぞ道理の最も自然的な發現である。だから神々の御性格にしても、皇威の發展高揚につれて、また等しく無限に展開向上せらるゝのである。普通考へられてゐる儒佛渡來以前に、すでにかゝる素地を、基本的には殆ど間然するところなくつくり上げてゐた日本の古道即ち古神道が、それからの時運と共に展開し向上し來たり、今日も亦しかしつゝあることは言ふまでもない。然しそれについてはやゝ十分なる認識を缺ける人もあらざるやを危ぶませることも數々ある故に、審かに論述したいが、餘り長くもなり、こゝでは事例だけをあげておき、他日を期することにしよう。

播磨風土記にある揖保郡伊勢野のこと、こゝには人家があつたけれども、いつも靜安なるを得ず。是に於て衣縫猪手ヌシノホテ、漢人刀良等の祖が來て、社を山の麓に立てて、山の岑に在す神伊勢都比古命と伊勢都比賣命を敬祭したので、爾後家に靜安なるを得遂に里をなした。又同郡佐比岡にも出雲の大神が在したので人々は神尾山といつて

居た。此の神は出雲の人が經過すれば十人の中五人、五人の中三人は留められる。故に出雲の國人等が佐比を作つて祭つたけれども和み受けられなかつた。その後河内國茨田郡枚方里の漢人が來て、此の山の邊に住んで敬み祭つたので和め鎮めることが出來た。此の二つの傳説は歸化人の神祇崇敬について啓示するところがある。

次には日本靈異記中卷第五の話。攝津國東生郡撫凹村ナリに一の富人があつた。聖武天皇の御世此の人が漢神カチカミの祟によつて不幸に遭つたので禱をしたのであるが、それは七年を限り年毎に一匹の牛を殺して祀るのである。七年七頭を供へて祭り畢つたところ、忽に重病を得たので、又七年間を限り醫藥方療したけれども猶愈えない。依つて卜者を喚び集めて祓ひ祈み禱れども病は彌増すばかり。茲に於て思ふに、我が重病を得たのは殺生の業に因るのである。故にこれより月毎に闕くることなく六節には齋戒を受け放生の業を修めようと定めて、他人が生類を殺すのを見れば價を論ぜず贖ひ、且つ人を八方に遣して生物を買ひ求めて放つた。七年目になり、命終の時に臨んで奇瑞があり、地獄の苦患を免れたので、已後神を祀らずに三寶に歸信した、云々。之は漢土文物の傳來に伴して來た漢神の信仰に對する淨化事蹟の一例である。

日本はあらゆる文明と思想との流入したところである。そして一應漢土天竺のそれで基調的なものは盡きて千餘年を閲して來たが、見様によつてはその間にこの儒佛が如何に古神道の信仰に關係して來たかが、神祇史神道史の内容をなしてゐるとも言へる。其れにつき神皇正統紀には、「我が神大日の靈にましませば明德を以て照監し給ふこと陰陽におきてはかり難し、冥顯につきてたのみ有り。君も臣も神明の光胤を受け或は正しく教を受けし

神道の苗裔なり。誰か是を仰ぎ奉らざるべき。この理を悟り、其の道に違はずば内外典の學問もこゝに極まるべきにこそ。道の弘まるべき事は内外典流布の力と云ひつべし」と謂つてあるが、誠に深く究むべき文句である。まことやかくの如く、我が國の本道たる神道は廣大無邊すべてを容れてその内容を涯しなく廣め深め崇める特性を持ち、以て天地と長久を儔ふする資質を古代に於て既に確立し、爾後それを實證して來てゐるのである。而もその事たるや神は人の正しき崇敬によつていよくその威を増し、人は還た神の靈威によつていよく恩徳に浴し、神人偕和して彌榮の道を進む。これが天地の化育を大成する所以たるを知らされるのである。

——昭和十六・一・三一稿了——